

## 嗚呼、旧制弘前高等学校開校百年

### 三十年の略史抄

旧制弘前高等学校は大正10年(1921)4月に開校、昭和25年(1950)3月、敗戦後の学制改革により三十年間で閉校した。

大正10年(1921)4月、借校舎となった市公会堂で開校式が行われた。この日、弘前市では早朝花火を打ち上げ、小学生全員が公園から追手門を出て市役所前の元寺町を通り、蔵主町の公会堂まで祝賀行列を行い、夜は中学生青年団が提灯行列を行った。

10月、富田町に校舎が完成、翌年(1922)4月に北溟寮ができるまで、新入生205人は、禅林街のお寺に分宿した。全国から集まった生徒は、弊衣破帽、高下駄姿で城下町を闊歩、大正ロマンの青春を謳歌した。その心情は、次の寮歌から推察されよう。

寮歌(大正12年) 脇本忠信作詞 菅谷知巳作曲

都も遠し津軽野に あふるゝ<sup>せいきわこうど</sup>生氣若人の  
胸に希望の春は来て 高なる血潮<sup>くれない</sup>紅に  
咲くは理想の花の色 潜む<sup>おおとり</sup>や大鵬みちのおく

しかし、生徒たちの自由闊達、バンカラな生活は長くは続かなかった。

昭和3年(1928)3月、共産党員数百名が検挙された(3・15事件)。7月、全国に特高警察がおかれた。弘高生徒たちが組織していた社会主義研究会に対しても弾圧の手が伸びた。

昭和5年(1930)2月、共産主義グループを組織したとして十数名検挙、放校3名、諭旨退学3名、無期停学2名を含む16名が処分された。昭和7年(1932)6月、満州事件に反対し農村の窮状を訴えるガリ版新聞を配布したとして三十数名が検挙され、諭旨退学6名を含む29名が処分され、社会主義研究会は壊滅させられた。

昭和12年(1937)7月、日中戦争がはじまり、戦時色が濃くなった。

昭和15年(1940)、皇国史観の平泉澄東大教授の愛弟子の先輩の働きかけにより、生徒間に日本精神研究会が結成された。北溟寮有志は『北島魂の復活』を編纂した。

昭和16年(1941)12月、日本は太平洋戦争に突入した。戦局の激化にともない、昭和18年(1943)、修業年限は二年に短縮され、教練科が科目に加わった。

昭和18年(1943)10月21日、文部省主催の出陣学徒壮行会が神宮外苑競技場で行われた。弘高でも寮歌に加えて壮行歌がつくられた。

壮行歌(昭和18年) 田沼修二作詞 長澤仁一作曲

嗚呼出陣の朝ぼらけ  
戦雲暗き<sup>あめつち</sup>八紘を  
大御光<sup>おみひかり</sup>におほふべき  
皇御戦<sup>すめいいくさ</sup>ぞ益良夫<sup>ますらお</sup>よ  
いかでおくれん今ぞ<sup>ゆ</sup>征く

敗戦後の昭和 20 年(1945)秋、授業は再開されたが、生徒たちの食糧事情は窮迫していた。

民主化と、それに逆行する思想弾圧の嵐は弘高にも及んだ。昭和 22 年(1947)10 月、植民地政策を批判して追われ、戦後復学した矢内原東大教授を招いて講演会を聞いた。一方、これより先の 3 月、教職員の政治活動を制約する教育基本法が制定されていた。

昭和 24 年(1949)4 月、教授会は共産党に入党した関戸講師に辞職を勧告した。これに対し、生徒自治会は、僅差で同盟休校を決議、5 月半ばから一ヶ月同盟休校に入った。学校当局は放校 3 名を含む 35 名を処分した。教授と生徒の信頼感は薄れ、生徒間の疑心暗鬼のなか、昭和 25 年(1950)3 月、学制改革により旧制弘前高等学校は三十年間で閉校した。

4,747 名の卒業生（一年修了の 28 回生を含む）を出した。

これより先の昭和 23 年(1948)10 月、三学年揃っての最後の第二十七回寮祭が行われた。前夜祭ではグラウンドを埋め尽くした市民の取り巻くなか、ファイヤーストームの炎が夜空をこがし、生徒たちはスクラムを先導に、扇ネプタを率いて市内を練り歩いた。

### 同窓会活動と著名な卒業生

閉校後も同窓会活動は続いた。

昭和 35 年(1960)、創立七十年記念祭に際し、弘高青春之像（高橋剛制作）を建立した。のちに、創立八十年周年記念祭に全在校生 5,325 名の銘版の碑が建立された。

平成 11 年(1999)、弘前大学創立五十周年記念事業（含む記念会館建設）後援会会長に大道寺小三郎が就任、募金に協力した。

平成 16 年(2004)、弘前大学の旧制弘高外国人教師館移築事業に協力した。

平成 17 年(2005)、創立八十五周年に当り、千<sup>せん</sup>秋<sup>しゅう</sup>萬<sup>ばん</sup>歳<sup>ぜい</sup>の式典を弘前で挙行、同窓会員 185 名が出席し、同窓会活動は幕を閉じた。

同窓生が母校へよせる思いは次の記念歌に表れている。

「青春遥かなり」（平成 7 年、創立七十五周年記念歌）小野正文作詞 山田榮一作曲

ここ弘前を 佳しとして

わが学校は 創まりぬ

翼繕いし 鳳雛が

圏を画きて 翔びたてり

星霜は実に 七拾五

今 青春は 何処ぞや

Schön ist die Jugend

卒業生のうち異色のものを挙げよう。

田中清玄（4 回、昭和のフィクサー） 会津藩家老の末裔、曾祖父が開拓使庁の役人になった縁で函館近郊に生まれた。大正 14 年(1925)、弘高二年次に社会主義研究会を組織した。

昭和2年(1927)、東大入学後共産党に入党、昭和5年(1930)1月、再建大会において共産党書記長に就任。昭和5年(1930)7月、逮捕され、3年後獄中で天皇制支持の転向声明、昭和9年(1934)6月に懲役15年の刑の判決を受け、昭和16年(1941)4月、恩赦で釈放された。

敗戦直後、昭和20年(1945)12月、天皇陛下に拝謁し、退位しないよう進言した。

土建会社を設立、戦災復興、開拓地の造成、ダム建設を手がけた。かたわら、インドネシア・アブダビの油田開発・輸入に関わった。政界の大物フィクサーと呼ばれた。小池明(19回、元同窓会会長)は、会津藩士の末裔の誼で、晩年の田中清玄と親しかった。

**津島修治**(7回、太宰治)、平岡敏男に誘われ、新聞雑誌部に入り、「弘高新聞」にプロレタリア小説を推奨する時評などを発表した。

昭和5年(1930)、東大仏文科に入学、井伏鱒二を訪ねた。青森の芸妓だった小山初代と生活をともにし非合法活動にかかわり、銀座のカフェの女と心中事件を起こす。

昭和7年(1932)、左翼運動を離れ、長兄文治に頼まれた飛島定城(2回、東京日々新聞、福島民報社長)が同じ屋根の下で暮らすことになった。昭和10年(1935)、都新聞の入社試験に不合格になり自殺未遂、短編で芥川賞候補となるが受賞をのがし、翌年、最初の著作『晩年』が候補にもあげられず、薬物中毒が悪化し、武蔵野病院に入院、小山初代と離婚、波乱の時期を送った。この間、平岡敏男(6回、同窓会長、毎日新聞社長)、上田重彦(7回、大阪成蹊大教授、石上玄一郎)が陰で彼を支えた。

昭和13年(1938)、井伏鱒二の紹介で石原美知子(甲府市)と結婚、三鷹に住み安定した作家生活に入った。昭和19年5月から6月、「津軽」執筆のため津軽地方を探訪した。

昭和22年(1947)夏、「斜陽」を発表するや、太宰の名は爆発的に高まり、「斜陽」は社会現象となった。しかし、それから一年、「人間失格」を発表後の昭和23年6月、玉川上水に身を投じた。一緒に入水した山崎富榮の兄年一(早逝)は太宰の弘高一年先輩だった。

**高橋延清**(11回、東大教授)、昭和13年(1938)、東大林学科卒業、北海道演習林に赴任した。広大な富良野の演習林を天然林に近い状態で管理する「林分施業法」を創出し、「どろ亀さん」と自称し、演習林のなかをくまなく歩き回って一本一本の樹と会話しているとの伝説をつくった。そして、ただの一回も本郷農学部の教壇にたたなかつた。平成4年(1992)、自然保護の学術研究に貢献したとして、日本学士院エジンバラ公賞を受賞した。

青森県に縁の深い卒業生を挙げよう

**高木恭造**(3回、つがる辯詩、眼科医) **明本京静**(5回、作曲家、「あゝ紅の血は燃ゆる(学徒動員の歌)」、戦後「武田節」) **津川武一**(7回、健生病院長、衆議院議員) **坂田二郎**(7回、同盟通信モスクワ特派員、NHK論説委員) **小野正文**(11回、青森県立図書館長、「太宰をどう読むか」) **野崎孝**(15回、弘高・都立大教授、サリンジャー「ライ麦畑で捕まえて」訳) **盛田稔**(15回、青森大学学長、青森県文化財保護協会会長) **竹内黎一**(23回、衆議院議員、科学技術庁長官) **前島郁雄**(25回、都立大教授、最後の同窓会会長) **大道寺小三郎**(26回、みちのく銀行会長) **山田榮一**(26回、日本寮歌振興会実行委員) **増田彰正**(28回、東大教授、仁科記念賞受賞)

## 津島修治（太宰治）と弘前高等学校



弘前高等学校前の通り（昭和3年2月頃）



弘前大学前の通り

・左上写真【弘前大学附属図書館蔵 官立弘前高等学校資料】・右下写真

昭和3年(1928)2月の写真右側の煉瓦塀は現在も残っている。富名醸造株式会社（現在、弘前銘醸株式会社）の煉瓦倉庫は大正7年(1918)に建てられたもの。津島修治（太宰治）（弘前高等学校昭和2年4月～昭和5年3月在籍）もおそらくこの前を歩いて通学していたのではないだろうか。太宰治は病弱を理由に学校の寮に入らず、津島家遠緑の御幸町の藤田豊三郎方（現在の「太宰治まなびの家」、現在地から北西約100mの場所）に下宿していた。

・右上写真【弘前大学附属図書館蔵 官立弘前高等学校資料】

太宰治の旧官立弘前高等学校入学時の証明写真（18歳：数え年）。「昭和2年4月入学 写真帖 生徒課」の文甲一組にあり

・左下

平成24年(2012)10月に開館した弘前大学資料館の記念スタンプ。教育学部の学生がデザインしたもので太宰治がデザインされている。